

# 徳川時代蝦夷地布教の一資料

龜田次郎

## 一、

未知未開の地に、新に宗教を宣傳するのは、中々容易な事業でなく、非常な難行苦行を経なければ成功するものではない事は、世界各國の史實が明かにこれを物語つて居る。自分は、今夏季休暇中樺太、北海道の各地を巡歴踏査したが、其際不圖獲得した一資料に依て、前人布教の苦心努力の一斑を推知する所があるから、それを今茲に紹介する事とした。聊、参考とならば幸である。

## 二、

自分の獲得した資料は、僅々五枚の袋綴半紙刷の写本で、表紙の右端に、

念佛  
上人引歌・全

とあり、其裏面、即、

蝦夷地善光寺三代

南無阿彌陀佛 念佛(花押)

前大木願辨瑞上人

と刻してある。本文は半葉六行二段で、二枚に印刷して、

念佛 ネンブツ  
上人 カモイ 子引歌

これや人々

はやおそひか

しぬがいやなら

まうす人なら

かりのからだの

せみのぬけがら

月も日もゆく

往て生れて

妻や子ともが

ともにねん佛

この世はかならず

後の代はまた

ひとつ連の

をしへを聞けよ

いち度は死ぬぞ

ねん佛申せ

いつなん時に

しにたるとても

すつるがごとく

しせざる國へ

こゝろのまゝよ

可愛そならば

申がよひぞ

やくなんうけず

浄土にうまれ

臺にすみて

徳川時代蝦夷地布教の一資料(龜田次郎)

ヲホシノハニベツチ  
なく樂しみ しぬ事そなし

同 にし歌 小師 佛彦  
フチゲン

今よりはみなんことにひびく  
に  
イッテウイラン ナムアミカキ  
わすれすまうせなむあみたふを

カモイワツタ ランマイノンノキウワシ  
南無阿彌陀佛と常にとなふる人はみな

クンム△シリカタ△ チカシノカルワ  
世のさいはいの来る也けり

アミチムイノンノクワトモ△カヤン  
阿彌陀佛ねがふ心をみそなはせ

ナムアミチムアミチンチ  
南無阿彌陀佛く

とある文句は行書や變體平假名で記し、其右側に、片假名で蝦夷語が付けてある。又他の一枚には半葉六行で行書體で念佛上人引歌序として、

一日富永氏なる居士の詣に、に。師房念佛上人蝦夷を誘の一ふしを。此に譯して示せしかは又なくかしこみ  
かゝる尊き御教を我籠耳に受け過さんは。最本意なき業にしあれば。一蓮の友と他の。妻子を識すたつ木とめせ  
まほしむ。桜木にえりて四遠に布むと。わりなく乞にめて、頓し寫もてあたへぬ。頃は天保水兄龍の文月末の五  
日。えみしが浦臼の山寺佛彦しるす。

とある。尙、最後に、白紙一枚の裏表紙が附けてある。斯の天保三年壬辰七月二十五日刊行の片々たる小冊子は、  
徳川中期以後、蝦夷布教の苦心努力を如實に示すもので、而も大なる興味を惹起せしめるものがある。又他方には、

今日儼存の名刹北海道膽振國有珠の善光寺の成立山來を物語るものである。此事に關しては、已に幕末から明治初年に亘つて我北陸の探險や開拓に大功績を遺した彼の有名な松浦竹四郎翁に依つても詳述されてゐるのである。翁の所述は、其名著多數の蝦夷探險記の一、「東蝦夷日誌」第二編（文久三年十一月成）に見えてゐる其首書には、

一編中大白山二世鸞洲上人垂誠三世辨瑞上人子引歌等を入る。上人の上人を教撫し玉ひしは人の及ばざる處にして弘法の爲のみにあらず。上人行狀實に不凡なるが故に是を誌置り。嗚呼今度の御所置の時に當り質直淳朴の民を教育するの有司其意を汲給はんことを。

と記して、當時の有司に注意を促したるのみならず、又本文最首「宇須」の條下にも、極めて精細に叙述してゐる所がある。今、冗を厭はず、其全文を抄出して示さう。曰はく

大白山道場院善光寺（淨土宗本尊曰坐三尊彌陀如來金佛津輕今別本覺寺五世貞典人作、背文享保十一丙午歲正月二十五日同國祈願所光善寺十三世青蓮社禪舉上人知榮和尚松前白山善光寺一光三尊如來開眼道場大願主上總國市原郡古敷谷村光明寺八世天慶社眞舉辨知頼阿和尚と有）善光寺と號るもウスに縁あり。また燒山の巔四く成て曰の形に似たるなど頗る因有も奇とす。抑此地に今の穴間と云に慈覺大師の舊跡とて古より地藏堂あり（海中出現のよし云）傍に石の彌陀の像等ありしが慶長十八年（癸丑）領主慶廣公至宇須營善光寺（松前志同舊事記）給ひ其後寛文六（丙午）年江州伊吹山平等岩の僧開空再興後また享保十一（丙午）年上總國古敷谷頼阿和尚再建す。今に慶長十八年棟札並に享保十一年の棟札あり、然其形斗の小堂なる故に享和二年戊午九月二十一日寺社奉行へ懸合けるに、新寺院の事停止たりと雖も蝦夷地は別の境にて追々御世話も有事なれば苦しからず、然と後に至り不正の筋も生すべきや難

斗に依て、新寺何ヶ寺と定め、其餘は庵室の類も成難事に極て然るべしと同年十月十一日寺社方(松平周防守樣)より挨拶有又十一月二十五日備前守忠精朝臣より達し有、(中略)追て五ヶ寺も建立の積りを以先當時三ヶ寺も遣寺致し度、尤彼地寺院共増家等も無るより追而増越等出来る迄は普請並扶持等も當御用金の内より賄可申とぞ(中略)住職は寺社奉行の方にて撰びの上野増上寺金地院の會下より可被下付、夫より翌々文化元子年淨土宗大日山道場院善光寺莊海(翌丑)三月出立(休明光記)し建立半にして遷化し給ふ。二世鬘洲上人は筑前の産にして法徳四方に隠れなし。徳本行者と共に紀州須加谷に山居なし給ひ後に行者を江戸に誘引し、自分此地に渡り、此一寺を建立し、文化四十卯年五月俄羅斯亂の時には處々へ佛幡を立て土人に地を守らしめ、身は彼等が炮丸に死すとも、外夷の恥を受事なかれと教撫し、一紙の垂誠を作り、是と一枚起證に夷言を附梓にのせ、又後世の枝折といへる書を著して施し、又或時は大なる數珠にて夷民に百萬返をくらしめし等も其法筵に連る者五百人余、是此地にて念佛の始め也。依てか豊の淡窓老人も君是空門第一人、乗桴胥度異邦民、元和佛性無南北、說甚毛夷不易馴、と因に其垂誠を爰に加ふ。

即今赤賊來寇して干戈眼に遍る。衆心風靡の如く、手足の置所を失ふ。切に恐らくは汝等傭輩の墜に墮して牙根定らざることを、この故に山僧一苦言を吐之硃鍼とせむ。汝等斯干戈の時に當て恐るゝ事なかれ驚くことなかれ、平生の教示は今日の爲なり。無常念に至常與死王居頼みなき露の命惜て留る我身かは死縁無量何ぞ今日の賊徒のみならん、本願大悲の來迎は時處をきらふなし、念佛の聲あらむ處は軍陣もまた聖衆來迎の道場也。今既に進退のがれ難し、前後共に賊軍也。四山來逼して外死王の殺鬼きをひ起る、唯心を決して念死念佛の外他事有べからず。夫治亂推移は古今の定數、倚仗常なきは穢土の習也。今更に驚べきにあらず。生死は分有、定業は逃がたし。

仲尼曰、死生有命。孟子曰、修身而待、世間之聖賢既に然り、出世の道人何ぞ執して心を形體に留む。況や我等渡海の初より弘法利生の爲に身心を放下せり。九流の俗士すら我を見ては生を輕んず、三寶の聖種覺境に對して死を恐んや。たゞ此眼前の轉變を見て増上厭苦の心を起し、身後の常樂を觀じて專心欣求の念をすゝむべし。徒に病床に臥て死せんよりは、勇進念佛の時機土を出ん事勇敷にあらずや。上機は頓に身命を捨ると尺す。背後の炮聲に命を捨ん事今日にあり。嗚呼無窮の生死は今日に縮まり、不退の淨土は瞬息に隣れり。豈思きや軍陣を臨終の道場として來迎を待べしとは、影をも計きや夷賊を逆知識として往生の先途をとぐべしとは。大衆至心に念佛して怨親平等一佛淨土の回向すべし。佛の加祐有らんには天下和順兵戈無用の巨益有べし。自行を全して萬民を益す。怨敵退散の祈願も此に有、今にして免るゝ事もあらば、深山幽屈に栖身して余生を送るべし。亂を巖洞に避、筆を飢寒の間に弄せられし先蹤を思ふべし。汝等たゞ淨業の勇進せざる事を憂ひて、賊徒の不治せざる事を患とせず、道俗分有所作おなじからず、彼は防戰の備を設ん、我は吾道を全ふず、其事同じからずといへども其守は一なり。大白山二世鳳興覺洲誌す。

また三世辨瑞上人も行者の法弟にて道徳著き御方なりしと。常に場所を廻り米袋を荷はせ、病人孤獨等有時は手當し、後世の事勸め、若者には子引歌といへるを作り是を蝦夷語もて教へ、自ら鉦打鳴し舞踊等し、また梓にのせ知人共にも施し給ひし故、今に上人を念佛カモイと云て尊敬しける也。上人常に行者の洪徳を諸人に示し給ふに、其中に一人の小才子有て、行者にはかく尊き御方なれば本地が有そうに存候由、難問しけるを、上人夫よりして晝夜ともに行者の本地佛をしらんことを願はれしや、或夜夢となく現となく、天童天降り一ツの箱を授け給ふに、是を

聞き見給ふと、徳本行者彌陀化身爲度衆生來入火宅汝等仰心莫生疑心と有にて、始て行者の本地佛を感得し、自らはを認め置給ひし也。(巢鴨一行院記錄摘要)如此大徳の懸錫なし玉ひしが故、今に黒肝の胡女までも稱名念佛する事とは成たり。(此ノ次ニ、念佛上人子引歌ヲ掲載セルモ、二三ノ文句多少異同アルノミナレバ省略ス)。

(又土人に片假名を教え給ひし由、續て辨定(四代)辨諦(五代)順立(六代)仙海(七代)と法燈依然として千島の隈を赫す。是偏に佛法不思議の謂爰に有る仰き登ぶべき事也。(下略)

と、尙次葉に、蝦夷人子引歌を願ふ畫圖をも載せてある。以上抄録の文に依つて、當時七代までの蝦夷人布教の狀況が能く描出されてゐるのである。自分の獲得した此小冊子は、只其第三世辨瑞上人丈の述作に過ぎないのであるが然し、また此に依つて其前後歴代の行跡が推知されるのである。延いては、今日までも、其法燈燦然として北邊を照してゐる理由もわかるのである。

### 三、

以上述べた所で、當時未知未開の僻地の布教に、如何に盡瘁した事が想ひやられるであらう。近く明治維新の直後に、大谷派の法主現如上人が巡錫され、其他、各宗の僧侶の宣傳や又外國人の宣教師の布教もあり、其結果として内外の宗教は、漸次北邊の地に弘通されて、今日の盛況を來してゐるのであるが、此等の人々の布教についての苦辛の後には、茲に詳しく述べる迄も無く、實に想像に餘りあるものがあるのである。今自分が本篇に述ぶる主意は、古人の布教努力の一端を示して、其全般を推知するの資料に供した譯である。吾々は前人の苦心盡瘁を追懷して、後進の益、奮勵努力を促してやまぬ次第である。布教の要諦は、熱烈な奮勵に存すると信ずる。(昭和十一年十月二十五日夜稿)